

続

# 保育の心

松下昌義



途上社

## 積極性と発達課題

一が出来て、はじめて二ができる。そして二ができてから三が出来るようになる。という道すじが「発達」ということです。

そして、一つのことが出るようになる年令、二のことが出来るようになる年令、三のことが出来るようになる年令……というものが普通の子どもならば、それぞれに具そなわっており、従って幼児の教育に於て大切なことは、一のことが出る年令に一のことを十分に、その子どもにさせてやる。ということ。そのようにさせてやることは自然と次のことが出来る準備となるのであります。このように、一のこと、また二のこと三のこと……それぞれ出来る年令に出来、またさせなければならぬ課題のことを「発達課題」と申します。

ところが、世間のお母さん、お父さんたちは、一のことが出来、また、させなければならぬときに一のことを十分させないで、二や三のことをさせようとしてしまいます。その結果、健全な子どもでなくなつて、とりかえしのつかないことになってしまう場合だつてあり

ます。

さて、「すすんで何ごとにもとりくむ子」、別な言いかたをしますと「積極性のある子」になるためには、実は子どもが成長発達する段階で、「積極性」ということを身につける時期があるのです。その時期とは三才から六才ごろの間で、この時期に積極性を十分身につけさせてやるように導かないと、後になっては仲々身につけにくいと言われています。（エリクソン）

幼児は三才頃になりますと、ひとり歩きが出来、自分勝手に動き回り、新しいことを次々とやりたがるようになります。つまり、この時期頃から幼児は「やってやろう」という「積極性」をもちはじめなのです。ですから、「自分でやろう」とするところ、思いを大切にしないで、十分やらせることが先ず大切なことです。しかし、この場合、やりたいことをやらして放っておく、ということは、結果的には、自分勝手に動きまわり、次々と興味のあることをやりたがる幼児になってしまいます。

幼児に正しい「積極性」が身につくようにするためには、幼児が「やってやろう」として

色々な行動をする時にその行為（遊び）に「まあよくできたわね」とか「強かったわね」とかいう共感が必要であります。また、驚ろいたり、喜こんだりする親の感動が絶対に必要なのです。このような親とのよろこびやおどろきや悲しみなどの共有を通して、いろいろなことをする時に、やがて、独りよがりの積極性でない、自分の身のまわりに適応した正しい「積極性」を自然と幼児は身につけ、大きく成長して行くようになるのです。

「だめ」「だめ」と否定し、「ああせよ」「こうせよ」と規制してはいないでしょうか。自分の育児を顧みよう。

### 積極性と母子関係

子どもが「自分でやろう」とする心を大切にし、十分やらせてやることが、積極性を養うこ

とにとって大切である。ということ、先に申しあげました。ここで注意していただきたいことは、親がなすべきことは、子どもの積極性を「どのようにして育てるか」ということではなく、子どもが本来もっている「自分でやろう」とする心を「どのようにして生かし、伸ばしてやるか」ということです。

そのために親は、先ず、母と子の関係が愛情にあふれ、相互の信頼感が疑いなきものとなっていなければなりません。

特に生後一年半ごろまではこのことに最も注意しなくてはなりません。つまり、幼児がはじめて外界と接するのは、母親からの授乳ということ、空腹になれば不快を覚え「泣く」ことにより、母親に合図を送ります。その結果、適切な授乳を受け自分の欲求が充されることにより、幼児は母親を信頼でき、安心して待てるようになり、従って、むやみに不安がったり、警戒心をいだくことがなくなります。このことは、ただ母親に対してだけでなく、すべての人々に対する安心感となってゆくのであります。

つまり「積極性」をもった子どもに成長するためには、第一に、生後一才半ごろまでに十

分、母と子との間に深い信頼関係を乳を与えるという母親の作業に於て、つくりあげておかなければならないこととあります。このことを先の「発達課題」ということから申しますと、一才半迄の発達課題は「母子間の信頼関係を確立することだ」と言えます。

さて、次に一才半より三才ごろまでに幼児にうえつけておくべきことは、自分を管理するしかたを身につけるといふことです。

幼児は一才半をすぎると、離乳・歩行・発語ができるようになり、一人立ちができるようになって来ます。そしてこの時期に、排尿・排便のしつけがおこなわれます。つまり、排尿・排便のしつけとは、筋力を母親のしつけにしたがって、上手にコントロールするということです。このことは、親のしつけかたにしたがって、自分を正しく管理すること。つまり「自律性」の基本を身につけることになるのです。したがって、一才半から三才ごろまでの発達課題は「自律性の基本を身につける」ということとあります。この場合、親は決して、今日言ったことと、昨日言ったこととが、しつけのうえで異っているというようなことをしてはなりません。しつけに一貫性をもたない親に育てられると正しい積極性を身につけることは

出来ません。

以上のように三才迄の発達課題を一つ一つふまえたうえにこそ、先に申しました三才以後の積極性が正しく身について行くのであります。

## 母 の 日

間もなく「母の日」を迎えます。

園では、子どもたちが、お母さんへのプレゼント作りにはげんでいます。

そこで、「母の日」の起<sup>おこ</sup>りや、その意義について少し考えてみたいと思います。

「母の日」の起源は、北米東海岸のウェブスターという町にある教会の日曜学校で、二十六年もの間、教師として奉仕をしていたジャヴィースという夫人がいました。ある日曜日、

夫人は神の愛・母の愛について教えているとき、「皆さんの内で、どなたか、お母さんの愛に、心から感謝を現す方法を考え出して下さる方が出ることを望みます」と語りました。

やがて夫人は亡くなり天に召されて行かれたのですが、夫人の死後の追悼会ついきかいの時、かつて日曜学校で夫人の教えを受けていた夫人の娘アンナは、母への感謝のしるしとして、カーネーションの花を一束ささげました。この有りさまを列席者は見て深く感動しました。やがて、かの有名な百貨店主であるジョン・ワナメーカーの支持を得て、同氏の店で五月第二日曜日に盛大に記念会が催されました。時は一九〇八年（明治四十一年）です。その後十九年程の間に全世界に広がり、今日に至っています。

ところで、聖書は、その十ちの教えの中で「あなたの父と母とを敬え」と命じています。

子どもが、自分を生み育ててくれた父と母とを愛するのは、当然のことです。それは、水は高きところより低きところに流れて行くごとく人間自然ことわの理りと申せます。

しかし、一步ふみ込んで考えてみますと、父や母が子どもから敬われ、愛されることで満足する。ただそれだけが「母の日」「父の日」であってはならないと思います。



父も母も、今自分が「父」となり、「母」となり、「ありがとうございます」と言ってくれる、その子どもがあることに深く感謝しなくてはなりません。

とすると、「父の日」「母の日」とは、子どもは「ありがとうございます」と言えるお父さん、お母さんを自分に与えて下さった神に深く感謝しなくてはなりません。

同時に、子どもの「父」や「母」は「ありがとうございます」という子どもが、今ここに与えられていることを神に深く感謝しなければならないと思うのです。

結局、「母の日」とは、母も子どもも共に、相互に最もよきものを与えてくださった神に向けて感謝の合掌をささげる日だと思えます。

いつも人間は、その根源に目を向けることを忘れてしまいます。

## 知能とはなにか

「頭のよい子」になってほしい、と親は願います。

では、「頭がよい」とはどういうことを指しているのでしょうか。

いろいろな意見がありますが、だいたい次の七つのことがらを指し、その七つのことから働きが総合的にすぐれていることを頭がよい、知能がすぐれているといっているようです。その七つとは次の通りです。

- ① ことばの理解力——これは、話されたこと、読んだものを、正しく、しかも早く理解する能力のことを申します。
- ② ことばを容易に表現する能力——これは、自分の考えをうまく表現できる能力のことです。
- ③ 数に関する能力——これは、数を正しく理解できる能力のことです。数を理解できることと、数を唱えることができることは全くちがいます。

④ 空間的能力——これは、例えば、話をきいただけではピンとこなくても、実物を見ると、ものわがりのいい人がいます。数字によわくても土地の広さや距離の目測に関して、特別の勘が働くといった能力のことです。さらに、一度見たものを正確に描きだせるとかいった能力をさします。

⑤ 知覚の速さに関する能力——これは、ものごとのちがいや、おなじであることゝはやくゝ見つけ、また、見分ける能力のことです。

⑥ 推理する能力——これは、ものごとを順序だてて考え、雑然としたこと、例えば雑然と並べてある数字や文字の中から一定の法則を見つけだすような能力です。

⑦ 記憶する能力——これは説明するまでもないことです。つまり、よく憶える力のことです。

以上、七つの働きが総合的、又は全体的によく働くことを「知能がよい」「頭がよい」と申します。

ですから、子どもの知能を伸ばすためには右に述べました七つのはたらきを、よりよく働

くように生活の中で、それぞれにふさわしい訓練をするようにすればよいわけです。

子どもは、よく遊ぶことにより、これら七つのことを自然と自分で訓練しているのです。しかし、親が、七つのことをよく知っていて、よく遊びを導いてやると、より一層身につけることができます。

白百合ホームでは、「ブレッター」を用いてこのことを系統的に訓練しています。尚知能テストとはだいたい、この七つの能力をテストしているわけです。

### 知能をのばす

先に知能の因子として七つのことを記しました。

そこで今回は、その因子の六番目に記しました推理する能力、つまり、ものごとを順序だ

てて考える能力をのばすためにはどのようなしつけをしたらよいのか、ということを中心に考えてみたいと思います。

子ども特に幼児の知能をのばすためには〇〇テキストといったものは必要ではありません。幼児は、テキストをもち、エンピツでノートに何かを書いて学習をしてゆくではありません。幼児は行動して学ぶのです。体験して学ぶのです。ですから、その年令にふさわしい習慣を身につけさせるのです。

そこで、先ず三才半になったなら、考えるということの基礎となる次のようなことを遊びとしてはじめて下さい。

いろいろな色のついたお菓子（例 マーブル・チョコというのがありました）をテーブルの上に、ざーっとあけ、赤い色・青い色・黄色……といったように、それぞれ分類遊びをするように指導するのです。子どもは、色や形の特長にに応じて分類することがとても好きです。このような遊びを「集合あそび」と申します。

この集合あそびが順序だててものごとを考える能力を養う第一歩になるのです。

ものを分類する集合あそびは、古くなって不用になった絵本などの中から、いろいろな絵を切りぬいて、お母さんは大きな箱の中に入れておくのです。そして、その箱の中から、その種類に従って分類を子どもにさせる。お店屋さんごっこをしてもよいと思います。その分類は、いくらでも種類に応じて小さく分類できます。このような集合あそびは日常生活のいろいろなところで手でさわれるもの、目につくものによって出来ます。

例えば、私たちの近所にあるノートルダム小学校の生徒は定まった服や帽子を着ており、日頃多く出会います。「あのノートルダムの子どもは〇〇の帽子をかぶっているね」「あの子は〇〇帽子をかぶっていないのでノートルダムの生徒ではないのね」…などといった会話をしながら道を歩きつつ出会う子どもを分類してゆく遊びが出来るわけです。

このような遊び、つまり集合あそびは、子どもに自然と推論してゆく形、つまり論理的なものごとを考える基礎を身につけさせているのです。

右のことを大人の埋くつでまとめますと、

◎「〇〇の帽子をかぶっている子どもはノートルダムの生徒である」

◎「向うから来た子どもは○○の帽子をかぶっている」

◎「だから、向うから来た子どもは、ノートルダムの生徒である」

これ即ち論理的思考の基礎である三段論法であります。

### 混乱のまった中にいる六才児

人間の成長というものは、決して一直線にすすんでゆくものではありません。時々成長は一時止つたり、時によっては成長どころか後退したりすることがあります。つまり、成長には、坂あり、ガタガタ道があるということです。そして、六才前後の幼児は正にガタガタ道の真只中を歩んでいる年齢なのです。

六才児は親から見れば全くの困った子どもに見えます。ときには、あらあらしく、おうへいで、また行儀がわるく、自己中心的で少し前の年令の時のように、やさしさなどが全くどこかえいってしまった感じがします。

「だんだん悪く、困った子どもになってゆく」と親は心配してしまいます。

「めんどうくさがりのごまかしじょうず」と六才児を表現する人もいます。気げんのよいとき、わるいときの差が大きいので、大変扱いにくいようにも思われます。

古くさいことには興味をもたず新しい興味の対象には、すぐとびついて、すぐく熱中します。こんな状態ですから、今まで身についていたとおもわれる生活習慣、例えば食事について、排泄について、脱ぎ着について、清潔についてなどがあともどりして、「五才の時の方が、もっときちんと出来ていた」と、親をなげかけさせてしまいます。食事についてみると食欲はおう盛ですが、一般にむらがあり、夕食など取らずにねむってしまう日などがあります。また、食事のマナーが失われ、手づかみで食べたり、疲れているときなどは、よく食器をひっくりかえし、それについて、しかられると「ママだって、こぼしたりするじゃないか」



と、他人の落ちどをあげつらいます。

また、清潔についても一部の神経質な子どものほかは、六才児は清潔について無関心です。そのくせ、他人の手足のきたないことには敏感で、いろいろと言います。ですから「ひとのことを言うより、自分のことをしなさい」、と親は叱りつけるのもこの時期です。とにかく、歯みがきも、洗面も、いいかげんにしてすまそうとします。まじめにやらせようとすれば、一日中親は口うるさくキーキーとごとを言いつづけなければなりません。

以上のように六才前後の幼児は、幼児自身混乱の中にいるのです。私はこの時期を「六才児の更年期」と呼んでいるのですが、次の成長へ移る一つのフシ目なので、しばらくやさしく、ほめて「待ってみる」ことが必要です。おそらく七才になれば、だんだんと落ちついて、めっきり小学生らしくなるはずで

。〔保育の心〕六才児は更年期を参照下さい

## 五・六才は自己主張がでてくるとき

五才後半・六才頃になると特に男の子は、乱暴な言葉づかいで攻撃的に親や教師に向けて来ることがあります。このような吾が子の姿を見て、とても心配されるお母さんがいらっしやいますが、これは子どもが成長していく過程で通らねばならない普通の道なので、決して心配される必要はありません。

五才・六才という年令は、幼児期から少年・少女期の人口に立っている時期で、今までのように親が決め、指示されるままに動くことで満足し安心していた思いでは、もの足りなく感じ、自分の考え、自分のやり方でやろうとするようになります。

ところが、子どもがする自分のやり方、また考え方が、周囲の親の考え方のわくからはみ出ることになると、結果的にしかられることになるのです。その時、子どもは子どもなりの考え理由があるので、それを主張し、おし通すために乱暴な言葉や行為で、せい一っはい自己主張の反抗をします。しかし、反面子どもは、自分が親より弱い者であるこ

とも知っていますので、その反抗は、自分の弱みを親に見せまいとする行為でもあるのです。

五才・六才の子どもには大きくなりたい、強くなりたいという願いが、その心の中にいっぱい満ちているので、幼児あつかいされることを、とてもいやがり、お父さんの言葉、兄さんの言葉、または園の中の力の強い子ども言葉などをまねたりして、強くなりたい、大きくなりたいという願いを、充足しようとするのです。

ですから、この頃の子どもをもつ親は、この頃の子どもの思いをよく理解してやって、頭ごなしに叱りつけ、禁止したりしないで子どもを考えや、やり方を、より上手に手助けしてやることにより成功させてやるということを考えてください。また、よく理由を言って、その間違いを説明してやることも大切です。

あまり禁止や否定ばかりしていると、成長しようとする自己主張がただの反抗心だけとなり、一層攻撃的な子どもにするか、ものごとへの意欲を失わしめてしまいます。

言葉づかいについても、自己主張の表れであるわけですから、そのつもりで、暖かく愛情をもって受けとめて、禁止するところは禁止するという態度が必要です。

「親の養育態度と子どもの反応」

兄弟偏愛	拒否	
<p>他のきょうだいをかわいがり肩をもつ 他のきょうだいと比較して非難攻撃する</p>	<p>子どもを無視する きびしく、不寛容である 子どもとの接触をさける はげしい罰をあたえる</p>	<p>親の態度</p>
<p>しつと心 みがみつよくなる きょうだいの競争やけんかが激しくなる 親やきょうだいを白眼視する</p>	<p>攻撃的になる 非行があらわれる 愛情がうすくなる</p>	<p>子どもにあらわれる行動</p>

	放 任	完 全 欲	
他のきょうだいを手本とさせ見習わせる	子どもをかまわなくてやらない 全く干渉しない ほめも、しかりもしない 子どもを冷笑する	子どもの現状に不満である 子どもに対してすぐ反対する 欠点をさがし出してはとがめる 意志を無視して親の考えを強制する	盲目的に可愛がる
家出する	自分中心的となる 勝手気ままにふるまい、反省がない 不道徳行為が多くなる 権威に反抗する	欲求不満が増す いつまでも自信がつかない 神経質になる 強迫傾向が増す 神経性症候（夜尿・チック）があらわれる	感情がいつまでも子どもっぽい

過保護

子どものために親が犠牲になる  
不必要に心配する  
過度に注意する  
放任しすぎる  
しつけをためらう

いつまでも親によりかかる  
親の支配から解放されない  
増長した行為が多くなる  
神経質のあらわれが増す

自立への旅だち

Ⅰ 新入園児のお母さんへⅠ

今までお母さんのもとで、一日中自分のしたいことを自由にして遊んでいた子どもが、お母さんのもとを離れて、ひとりで見知らぬところで、全く見知らぬ多くの者と、きめられた規則の中で、たとえ二時間でも三時間でも過ごすということは、その当の子どもにとって、

とても不安なことであります。ですから、幼稚園の門の前で、お母さんと別れるのがいやだと言って、子どもが泣くのは当り前なのであります。しかし、それがどんなに淋しくて、悲しくて、不安であっても、その子どもが一人自立して行くためには、どうしても越えねばならない関所なのです。

子どもにとって幼稚園入園とは、自立への旅立ちだと申せます。この自立への旅立ちをうまくさせてやることは、その子どもが将来、多くの人々と共に社会の一員として、よく働いて行く者となるために絶対に必要なことなのであります。

ですから、子どもたちを迎える園の教師たちは、全員一つになって、幼稚園は楽しくて、おもしろくて、やさしい人々が多くいるので少しも不安をもったり、心配しなくてもよいところだということを、子どもたちが感じてくれるよう一生懸命努力するのであります。このように、先ず園に慣れることが何よりも大切であります。

こうしたことは、普通三才頃より芽ばえ出す自立への意欲と合いもって、充分耐えて、身につくようになりはじめるのであります。ですから、親は子どものその芽ばえを良く養い育

ててやる必要があります。決して、必要以上に「だいじょうぶだろうか」、「出来るだろうか」と心配して、その芽ばえをつみとるような言動はせず、むしろ「えらかったわね」「かしかったわね」と言っておきあげ、ほめそやし、はげましてやってほしいと思います。

それにしても、毎日の園生活は、子どもにとって肉体的にも精神的にも相当なつかれを生むものです。

自分でしなくてはならないことが多くなり、他の子どもの中でいろいろと我慢をしたり、注意を多くはらったり、自分を主張するために一生懸命話したり……で、その負担でくたくたになっています。

その結果、かえって園に行く前より、ぐずついたり、泣きやすくなったり、夜中に寝ぼけたりすることがあります。

そこで必要なことは、充分なる休息です。また充分なる睡眠をとることです。この点くれぐれも気をつけ、ぐずついた時は、「受けいれてやる」ことが必要であります。

いずれにしてもこれらは、越えねばならぬ関所です。そこを越えてこそ子どもは大きく



成長するのであります。

お母さんも一諸にそこをのり越えて下さるようお願いします。

### 園ではいい子だが

園ではとてもいい子で、なんでも自分でやり、きまりをきちんと守って破るようなことはなく、友だちにも親切で少しも手がかからないとてもよい子だと思われている子が、一旦家に帰ると暴れまわり、妹や弟を泣かせたり、母親を困ませたり、あげくのはては近所の子をいじめたりする。わるい子、困った子になるというような子どもがいます。

このようなお子さんを見て、「この子は二重人格のもちぬしだわ、このまま大人になったらどうしよう」とおおげさに心配されるお母さんがいらっしゃいます。勿論、お母さんのご心配のむきはよくわかります。が、ここでそのお子さんの心の中をそうとぞいでやると、

そのお子さんは心の中で一生懸命に闘っていることがわかります。それは、一口に言って「いい子」の自分を園では崩さないで、じっと耐えているのです。けんかもしたい、暴れもしたい……したい、けれども先生やお母さんのいいつけを守って「いい子」であろうと我慢し努力しているのです。

ところが家に帰って来ると、その我慢、努力が崩れ、園で我慢した分だけ、努力した分だけ、発散させようとして、いろいろな困ったと思われる行動が出て来るのであります。

このような子どもの心のうちをよく見て、むしろ温かく気楽に家ですごさせてやるようにする必要があります。「園ではいい子なのに、どうして家では悪い子なの」と言って、家でのしめつけはしてはならないとおもいます。

外でも内でも「よい子」でいるということを親は子どもに要求しがちですが、それは無理なものです。

家で温かく見まもってやってやるうちに、やがて成長するにつれ、自分で上手にバランスをとれる子どもになって行くにちがいません。

ただ、園ではこのようなお子さんには特にある程度「いい子」でなくてはと思うそのわくを崩してやるはたらきかけをしています。そして、自分の内なる「崩したい」と思う欲求を思いきり、ルールに従って発散させてやるように遊ばせてやるよう指導します。

このようなお子さんには、口やかましい干渉はただちに止め、太陽のもとで、土の上で、友だちと、どろどろになり、伸び伸びと遊ばせてやることです。

また、こういうお子さんの中にはとても神経質なかたもいられますが、こんな場合はたいてい、お母さんも神経質な傾向をおもちのようです。

尚、お家でのお子さんのありのままの状態は、心配せずに園の方におしらせいただきたいとおもいます。

## ちよつと目を離すと

親が目を離すと、すぐどこかへ行ってしまったたり、何かしでかしてしまふのが幼児です。その度ごとに親はあわてふためき、ふりまわされてしまいます。しかし、子どもはそのようにしてこそよく育つのであって、その時、その場こそ教育の時、教育の場なのです。

一般に正常に発達し成長している子どもは、自分の興味と欲求のままに行動するものです。幼児の場合、何がよいか、何が悪いかということをおぼえていません。しかし、三才から七才ぐらいまでのこの時期は、大人が叱ることは悪いこと、大人がほめることは善いことであり、その大人の指示に従おうという考えをもっています。

ですから、大人はこの時期に子どもの行動によく注意をしていて、好ましいこと、好ましくないことを一つ一つ実際にそれらが起り、行動した時にしっかりと指導し教え込むことが大切なのであります。それが起らない先から教えたり、起っても、大分時間がたってから後で、ぶつくさいって叱っても子どもには通じません。しかも、叱る時、又はめてやる時は何につ

いて叱られ、何についてはめてもらっているかということをはッキリと理解させることが大切で、クドクド、ブツブツと、ずーと以前に起ったことなどもちだして叱ったり、あげくのほたては、あまり関係のないことまでもち出して、ブツクサ言っているのは、叱ったり、ほめたりする効果は無くなっています。

興味にひかれて遠くへ行ったり、びっくりするようなことを子どもがする時、警戒心を忘れがちになり、時と場合によっては、とりかえしのつかぬことになります。ですから、親は常に子どもが日頃どのようなところで、どのようにして、どのような友だちと遊んでいるかまた、どのようにその遊びが発てんして行くだろうか、ということに注意をおこたってはなりませんし、だめだ!! と思えばハッキリと中止させ、よい方に導くことをおこたってはなりません。

特に三才ごろまでは、子どもは親の目のとどくところで遊んでいます。が、三才をすぎて来ると、特に五才・六才頃には親の目のとどかぬ遠くへ出かけ親がびっくりするような遊びをして得意になっているものです。

また、この頃から自分たちだけの秘密をもってよるこんでいるときがふえて参ります。

とにかく、親は子どもの行動についてよく知り、少しはなれて管理してやり、ことと次第によっては、す早く、その場で叱りほめてやらねばなりません。子どもは、このようにして良いこと悪いこと、あぶないこと安全なことを知り、身につけて行くのです。

子育てはひまひまに出来ることではないとつくづく思います。

お母さん、がんばって下さい。

## 大切な二つのこと

自主性を伸ばしてやること、情緒の安定をはかってやること、この二つが幼児を育てるうえで最も大切なことがらです。

自主性については、ここではおいておき、特に情緒の安定について考えてみたいと思いま

す。

情緒が安定していないと、いろいろ攻撃的行動が現われたり、無気力になったり、頭がいたいとか、お腹がいたいとかなどさまざまな身体の症状を訴えたりします。そして情緒不安定がつもり、つもって来るとき、思春期になって精神病のような形で現れて来ることがあります。つまり、幼児期に情緒的に安定させて育てるといことは、とても大切なことです。

一般に情緒を安定させてやる育て方の大切な点は、三才頃までの育児の仕方の中で、お母さんとかかわりに於て身体からだで甘えさせてやるということです。お母さんのひざの上にのったり、夜など添い寝をさせてやったり、お母さんの布団の中にもぐり込んで来ることをゆるしてやったりすること。特にそれを、楽しんで受け入れてやること、それらを通して幼児は自分のもっている不安を解消することができます。

ところが、思春期以後になって精神病のような行動を現わす子どもには、えてして、一才から三才にかけて「甘え」がない、甘えさせてもらわなかった子が多いと言われています。

お母さんも「甘え」がない、また「甘え」させないことが独立心が発達しており、よい子ど

どもとしてほめたりする誤りをおかしている場合が多いようです。例えば、お母さんが外出するとき、「いってらっしゃい」と言って送り出し、一人で留守番をしている。近所の人も「しっかりしているわねえ。えらいわねえ」といわれたような子どもなど。実はその場合子どもは、一生懸命がまんをし、自分の本当の思いにうそをついていたのです。それは、お母さんや他人の人々にほめてもらいたいばかりに、お母さんに「いっしょに行く」と言うことができなくなっていたのです。

ですから三才頃までの子どもの正常な姿は人見知りをしたり、お母さんから離れられないというのが当り前で、それはむしろ情緒が安定している姿だと申せます。

独立心をつけようとして、三才ぐらいまでの子どもを、無理にお母さんがつきはなして育てることは、子どもの人間形成に重大な悪えいきょうを残すことになります。

三才頃までは充分甘やかしてやること、特にスキンシップ、つまり肌と肌とのふれあいを多くもつことがとても大切であります。

今、四才五才・六才のお子さんと、このことの欠けていたと思われるお母さんは、今から



でもおそくありませんから、なるべく、やさしく手をかけて育てていきたいと思えます。  
尚、スキンシップについては「保育の心」98頁をごらん下さい。

### 食事がすすまない 何が原因なのか

「近ごろ、子どもが食事をすすんでいないので困っています」というお母さんのうったえを聞くことがあります。

食事は、子どもの成長発達と健康の保持増進とに深い関係があるだけに、子どもがあまり食事をすすんでしないとお母さんたちは、つい心配してしまうのは当然であると申せます。

でも、そのほとんどは全く心配する必要のないもののようなのです。と申しますのは、時期的な問題であるからです。

乳児では三ヶ月と六ヶ月、満一才前後、また三才四才ごろ。これらの時期に、一時的に子

どもは食欲の減退をおこすようです。ところが、その時に、「これは大変だ」とお母さんは心配して「それ食べ、やれ食べ」と、つい強制しますので、よけいに子どもは食べなくなってしまう。

一時的に食事がすまなくなることを一般に「生理的食欲不振」と呼んで病的な不振と分けて考えられています。

以上のことをよく理解していただいたうえで、次に食欲不振になる原因が子どもにある場合について知っておいていただきたいと思えます。

- ① 過敏性体質のお子さん、つまり神経質な子ども。
- ② 過保護であまやかされている子ども、小食、偏食、拒食をして周囲のものの注意をひいたり、希望をかなえたりするため。

次に、食事のしつけ、与え方に原因がある場合があります。

- ① しつけが不十分で、離乳の時期の食事の訓練が不足して、固形食をとらない。
- ② 食事の礼儀作法をことさらやかましく注意したり、食事中に興奮させたり、不快な感

情をおこさせたりする。

③ 食べないとき、後になって代用の何かを与えてしまったりする。

④ 食事の与え方がきまぐれである場合。

⑤ 必要以上に「食べなさい、食べなさい」と言って強制する。

このほか、家庭内でいろいろ問題があつて、子どもが不満や葛藤をもったり、反抗をもったりしている場合。

以上のほか体が悪く病気で食事がすすまないことは当然あるわけですが、親は、子どもが食欲不振になつた場合一体何が原因なのかということをよくしらべて、正しく子どもにかかわってやるのが大切であります。ただやたらに、「食べなさい」「食べなさい」と強制するだけでは本当の解決にはなりません。

お母さん、がんばって下さい。

入園して一週間 ― がんばれ新入園児 ―

新しい年度の保育がはじまって一週間たちました。進級してクラス担任の先生が代った年長ぐみの園児、新しい友だちを迎えた年中ぐみ、さらに、全く新しい生活を始めた年少ぐみ、それぞれが精神的に緊張してすごして来た一週間でありました。その中でも、新入園児には、とても大きな生活の変化が起ったわけで、大変な一週間であっただろうとおもいます。

今までお母さんのもとで、何くれとなく世話を受けて来た子どもが、お母さんから離れて、集団の中で自分で自分のことを処理しなければならないことが急に多くなり、いろいろと思うようにならなくても我慢しなくてはならず、さらに、自分を主張するために何かを話さねばならない。とにかく、その精神的な不安と緊張とのたたかひのため心も身体もくたくたに疲れて来ていることとおもいます。ですから何よりも第一に、心も身体も休ませてやることです。休ませてやるということは、やさしく労をねぎらい、ほめ、甘やかしてやるということです。そしてあまり園での様子など親の側から、くどくどと問い出すことをせず、子ども

が話してくればそれを喜んで聞いてやるだけでよいとおもいます。また、日曜日など、親の都合勝手で遠くへ連れ出すことなどは、少ししないほうがよいとおもいます。

入園来の緊張が疲れとなっていていろいろな形でできます。例えば、食欲不振、夜泣き、夜尿、外出拒否、ぐずり、甘ったれ等々です。今まであんなに良い子だったのにどうして？…とお母さんは驚き、途方にくれることがあります。特に、日頃活潑な子どもほど、新しい園集団でがんばりますので、ある日突然にぐずつき出す場合が多いことがあります。

とにかく先述の通りに、よく休ませて下さい。やたらと叱咤激励ばかりしないでほしいと願います。

また、集団の中に入りますといろいろな菌があり、したがって感染しやすくなりますからそのためにも充分休ませていただきたいと思えます。少なくとも10時間から12時間はすいみんをとるようにして下さい。

そして特にお願いしたいことは、子どもがぐずついたり、その他変わったことが起った場合すぐに園の方に連絡ノートなどで知らせていただきますように。

子どもたちが大きく成長するために乗り越えねばならぬたかいが、今はじまったばかりです。親も教師も温かくはげましてやりたいと思います。

## 夜 驚 に つ い て

「夜驚」というのは、眠っている子どもが、急に何かにおびえたように泣きだして恐れを口走ったりする。いわゆる恐れや驚きの反応のことを申します。このような「夜驚」は、たいてい眠りにはいって一・二時間ほどしてあらわれることが多いようです。

親は、はじめはびっくりにしてしまいます。

では、なぜ夜驚がおこるのかと申しますと、いろいろな原因があげられています。たとえば、鼻閉塞とかアデノイドの肥大とか、低血糖症、また胃の圧迫感、てんかん、さらに子どもが寝入ってから一・二時間ほどして、肛門から出て来て、その周囲に卵を生むために安眠を妨げるぎよ

う虫などがあります。しかし、一般には昼間子どもが体験した強い刺激があげられるようです。強い刺激と言っても、これまたいろいろあり、テレビの場合もあれば親に強くしかられたこと、さらに長い時間忍耐と強制とを要求させられた体験などがあげられます。幼稚園に入園してから起る場合など、この昼間の強い刺激を体験したということになります。

しかし、子どもすべてに夜驚が起るわけではありません。起りやすい傾向をもった子どもがあります。それは、せん細な神経をもった子ども、つまり神経質な子ども、このような子どもは一般に感受性も鋭く、普通には聞きながし、見のがしてしまうことでも過敏に反応して神経を緊張させて不安を強く感じたり、反対に喜こんだりします。

そこで、このような子どもに対する指導は、先ず、園の方に夜驚が起っているということを連絡していただきたいとおもいます。そして原因をハッキリさせて、不安や緊張をとりのぞくようにします。つきに、寝る前には興奮を与えるようなことはせず、安らかに眠るよう導いてやることです。尚、夜驚がたびたび起るようでしたら、先述の通り身体的な面もしらべておく必要がありますが、実際はあまりないようです。

夜驚が起っているときは、しっかりと抱いてやり不安をとりのけてやるように語りかけて再び眠らせてやることです。

### 過敏性体質と神経質

わたしたちには、生れつきもっている体質や性格傾向というものがあります。そのなかの一つに「過敏な体質」というものがありますが、これは一般にアレルギー体質とよばれ、何か異常体質のようにおもわれているようです。

しかし、この過敏な体質は、少しの外からのしげきにもすぐに反応してゆく力が強いことなのだとなれば、むしろ反応力が弱い体質よりも、早く体を攻撃して来る外からのしげきを感じとらえることが出来るという意味で、大事に至る前に自分の体を守るわけですから、体の防御力という点からは強い体質だと言えます。ただ、「過ぎたるは及ばざるが如し」と



いうことで、反応があまりにも強い場合には「えきり」や「自家中毒」など起し、とても心配になることがあります。

さて、過敏な子どもにあらわれやすい身体的な症状は次のようなものだと言われています。

- ① 頭にくろいこけのようなものがつく。
- ② ほおがかさかさした状態になる。
- ③ じんましんのようなものができ、かゆみが強い。
- ④ くりかえしおこる鼻かぜ、くしゃみ。
- ⑤ ぜんそく性気質支炎、目が赤くなる。
- ⑥ 皮ふの色が変りやすい、手足のひえしもやけ。
- ⑦ 嘔吐・下痢・便秘・尿が近い。
- ⑧ 鳩胸・その他髪の毛が赤い……。

では、過敏性体質はどうなるのかと申しますと、成長・発達と刺激に対して慣れるにしがたがって軽くなって行くようです。「もう、すっかりなおりました」という卒園児のお母さんの言葉を、卒園して五・六年たって聞く場合が多くあります。

とにかく、故障が起りやすいわりには案外と強いようです。ですから、あまり心配しないほうがよい場合が多いように思います。

ところで、この過敏性体質の傾向をもつお子さんは同時に神経質傾向の強いお子さんであ

る場合が多いようです。この場合の神経質傾向と申しますのは、精神的反応が過敏であるという事です。例えば、眠りが浅いとか、不きげんになりやすいとか、いろいろのものに恐怖をおこしやすいとか、人見知りをおこしやすいとか、ぼんやりしている、臆病、はにかみ……などの特徴があるようです。

とは申しましたが、生れつきか、それとも生れてから育ってきた環境がそのような神経質傾向を与えてしまったのか、どちらがどうだと一方的な決め方は専門家でもわからないようです。

ただ今回は、生れつき過敏性体質な子どもがあり、そのような子どもは、時として、神経質傾向の強い場合があるのだということを知って、気長にゆっくと、あまり心配しないで成長を見守ってやりたい。ということを考えてみたいと思いました。

## 親の顔色をうかがう子

すぐに親の顔色を、それとなくうかがって、「ほんとうにいいの？」と言葉でたしかめたり、態度でそれとなくたしかめる子どもがいます。何かおどおどしたようなその態度に子どもらしいむじゃきさが欠けている子ども。こんなお子さんに出会うと、とても気になります。

このような子どもの態度が出て来る原因は、そのほとんどが大人の干渉すぎにあります。子どもが何をすることも、「これだめ」「あれだめ」「これはこうするの」と、いちいち言われていると、しまいには、子どもは自分の自信を失って、親の言うとおりに、大人のいいつけ通りにしておけば安心ということになって、親や大人の指示をまち、承認を求めるようになって、その結果が親や大人の顔色をうかがうということになります。

「あのね、お母さん……」と言って子どもが語りかけ、話をして来たときには「うん、うん」と言って聞いてやり、ただ聞くだけではなく、「それからどうなるの、おもしろそうね、早く次を言ってよ」と、子どもに、自分の話したことが親を感動させた、という体験をさせ

てやることはとても大切であります。その場合、話の内容が少しぐらい変であってもかまいません。それを子どもが何か言うたびに、「そんなはずはない」とか、「それは変だとか」「それはうそでしょう」とか母さんや周囲から言われたのでは、子どもは二度と自分から言ったり、積極的なものごとをしなくなってしまう。

遊びに於ても同じです。一つ一つ親が口や手を出さず、子ども自身失敗し、苦労し、やり直し、のり越える姿を見守ってやり、最後に「よく出来た」と充分にはめてやればよいのです。

園生活の中で、すぐに教師の顔色をうかがって来る子どもがいます。それは教師の指示をまっているのです。指示されずに自分ですることがとても不安であり、自信がないのです。このような子どもにも自信をもたすには、何かを一人でやったとき、このときとばかりに、すぐ「オーバー」に教師は驚ろき、ほめてやるのです。このようなチャンスがその子どもにも来るのを教師は待つのです。注意深く待つのです。このようにして、今まで幾人もの子どもにも自信をつけて来ました。子どもは明るく、生き生きとなり、見ちがえるほどに積極性を身に

つけます。

顔色はうかがわずとも、今よりもっと自信を子どもにつけるように、子どもに対するかわり方を親たるもの反省したいと思います。

### ― 他人を発見させる ―

何ごとに於ても自分中心でないといけないという子がいます。こういう子は必ずといってよいほど独占欲も強いといえます。一番でないため。何でも自分だけのものにしたがる。友だちも先生も、おやつも、おもちゃも。こういう子を「わがままっ子」とも申します。

このような子は、謂所悪い子なのではなく、自分に対して、自分以外の他人といふことがまだ、はっきりと見出していない子だといえます。

では、自分以外の他人を子どもが見出し、発見するのはどのようにしてかと申しますと、

その子をとりまく大人たちが、子どものいろいろな要求を、ホイホイと受け入れてはだめです。そういうことをしていると、何ごとも自分の要求は通るものだと思ひ込んでしまいます。例えば、子どもが二つめのケーキに手を出したとき「それは、〇〇ちゃんのケーキだからだめです」とキツパリ言うべきです。そのとき、その子は「あゝそうか、わたしがとってしまえばほかの人のぶんがなくなる」ということを発見するのです。

ところが、二つめのケーキをとろうとするとき、「まあいいや」とだれかが黙ってゆずってやったりすると、子どもはそれが当り前のこととして受けいれ、いつでも、どこでも同じように思い込んで、当り前のように要求して来るようになります。つまり、がまんのできないわがままっ子になってしまうのです。

園の中で、ときどき、いろいろなものをめぐって、うばいあいや、権利の主張のしあいをやり、はげしくけんかをするのが子ども同志で起ります。このようなけんかは、子どもにとってとても大切なことで、教師や大人は正しく見えて、わがままをゆるさず当然の権利を認めてやるように指導してゆくならば、子どもはけんかを通して、他人の発見をしてゆく

のです。そうして、がまんすること・ゆずること・正しく権利を主張することを学びとって行くのです。それゆえに、他人を發見する五・六才頃までへんにあまやかしたり、ことさらに大人たちがゆずったりしないようにしたいものです。

ときには、おやつだとか、その他のものを家族や兄弟姉妹で分けるとき、子どもに平等に分けさせてみることは、とてもよいことだと思えます。

自分が一番。相手を認めない。善悪の判断がつかない。ルールが守れない。すぐいばる。このような子は、すぐけんかを起し、仲間はずれになってしまいます。しっかりとしつけないといけません。

どもり  
吃音がめだつ子 — についての一般論 —

子どもが、どもって話すと親は心配します。このまま大人になっても治らないのではない

かと。しかし、幼児のどもりは、特別なものをのぞいて“生理的どもり”と言って、大人のどもりとは別のもので年令がすすむにつれて、消えてゆくようです。

どもりがおこりやすいのは二才から五才ごろで、女より男子に多く、男子のほうが一年生になって消えるという場合が多く、女子より消えるのが遅くなるということです。ですから、基本的には、幼児のどもりは心配はいらないと言えます。

では、なぜどもりがおこるのか、その原因および理由を考えますと、幼児の知能が進んでも、その表現力が不十分なために、同じことをくりかえして強調しようとするためとか、精神的な緊張をおこしやすいためとかが考えられています。また、どもりをおこしやすい性格傾向としては、神経質、まじめ、小心、内向的、あわてんぼう、興奮しやすい子などがあげられています。結局、過敏で緊張しやすい傾向の子に多いようです。

そこで、子どもがどもる場合に親が気をつけねばならぬことは、一般に次のようなことがらです。

- ① 子どもにとって楽しい聞きてになってやること。



② 子どもが話しているのを途中でさえぎらないこと。つまり、最後まで、ゆっくりと聞いてやること。

③ 子どもに上手に話すことを教えないこと。例えば、「そんないい方はいけません」「もう一度はじめからいってみなさい」、つまり、ことばのうえでの禁止や非難・命令などを出すことにより、話すことに子どもが必要以上に神経をつかうことのないようにしやること。

④ 子どもが、つかれているとき、興奮しているときなどに無理に話を引き出さないこと。つまり、子どもの心を休めてやるのが大切です。

⑤ 子どもを監視しないこと。つまり、期待が大きすぎたり、きょうだいと比較したりするとき、子どもには、親のその目は冷たい目であり、不安を覚えたり、萎縮してしまいます。以上のことを一口に申しますと、必要以上の嚴格主義・強制的な育児態度をさげ、情緒的な不安や緊張をとり除いてやるのが大切です。